

北医療薬会報

発行所 北海道石狩郡当別町金沢1757番地
北海道医療大学薬学部同窓会

☎(0133)23-0301 直通・FAX
☎(0133)23-1211 大学代表
発行人 桂 正俊

印刷所 (株)正文舎

札幌市白石区菊水2条1丁目4-27
☎(011)811-7151



目 次

巻頭挨拶 同窓会会長 桂 正俊	3
第38回 北医療薬 総会および医療薬学セミナーについて	4
定年退職される先生をご紹介します	4
定年退職される先生からのメッセージ	
大倉 一枝 教授 生命物理科学講座（放射薬品化学）	5
平藤 雅彦 教授 薬理学講座（薬理学）	5
八木 直美 教授 薬学教育推進講座（薬事法制）	7
和田 啓爾 教授 衛生薬学講座（衛生化学）	8
支部だより 中国・四国支部	10
卒業生からの近況報告	
第17期 薬品分析化学教室 佐藤 博輝 さん	11
在学生からのメッセージ 薬学部 5年 木村 良太 さん	12
第65回 北海道薬学大会で本学同窓生日本薬学会北海道支部奨励賞受賞	13
2018年度オープンキャンパスのご案内	14
第10期生卒業30周年記念祝賀会 齊藤 千里 さん	15
第2回 薬学部同窓会「卒業生・在校生合同懇談会」の報告	16
北海道医療大学 同窓会☆コラボ講演会 第11弾について	16
お知らせ（北医療薬 総会ならびに懇親会のご案内）	18
編集後記	18

巻頭挨拶

「会長就任のご挨拶」

北海道医療大学薬学部同窓会会長

桂 正 俊



昨年7月に開催致しました北海道医療大学薬学部同窓会総会に於きまして、田中稔泰前会長の後任に選任されました12期卒業の桂 正俊でございます。歴代の同窓会長は、初代1期生の玉木氏、2代目が1期生の嘉陽氏、3代目が1期生の星野氏、4代目が2期生の山崎氏、5代目が3期生の田中氏、そして私が6代目の会長となりますが、12期生とまだまだ未熟な私でもあり、身に余る重責ではありますが、各会員のご支援とご協力を得て同窓会の発展に微力ですが、その任を全うしたいと存じますので、ご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

北海道医療大学は、今年で44年目を迎え、現在学部は薬学部、歯学部、看護福祉学部、心理科学部、リハビリテーション科学部、歯科衛生士専門学校5学部8学科1専門学校となり、全国でも数少ない医療総合系大学として発展しております。さらに、来年には“医療技術学部臨床検査学科”があいの里キャンパスに新設されます。また、2015年にあいの里キャンパスの近くに開設した「地域包括ケアセンター」では、地域住民が気軽に立ち寄れる憩いの場だけではなく、多職種連携の教育の場として実践的な実習を行える環境へと進化しております。まさに本学の教育目標である「新医療人育成の北の拠点」として地域医療へ貢献する専門職業人を育成することを社会使命として教育は進歩しており、母校の益々の発展に同窓会としてとても誇らしい気持ちであります。

一方、北海道医療大学薬学部の今年の卒業生は第41期生となるとともに、第1期生から全国各地で活躍している卒業生は約5,500名となりました。現在北海道医療大学薬学部同窓会の支部は、札幌支部、

道北支部、十勝支部、道南支部、釧根支部、オホーツク支部、日胆支部の道内7支部と青森支部、栃木支部、茨城支部、北越支部、神奈川県支部、東海支部、関西支部、中四国支部、九州支部、沖縄支部の道外10支部、計17支部が設立しており、支部単位でのセミナーの開催や会員同士の交流等がすでに行われております。しかし、すべての都府県で開催されている訳では無く、今後各支部の状況を調査し、より良い支部組織を検討して行きたいと考えております。同窓会本部でも北海道医療大学薬剤師支援センターと協力し、「将来ビジョン講座」「医療安全対策講座」「臨床薬学講座」「認定・専門薬剤師養成講座」「がんプロフェッショナル養成講座」等卒後教育を目的とした講座を毎月開催するとともに、北海道医療大学の他学部同窓会とのコラボ☆講演会にも参加し、同窓会組織の輪が広がっております。また、昨年から“札幌紀伊國屋書店インナーガーデン”に於いて一般市民を対象とした市民公開講座を開催しております。

平成18年から薬学教育は6年制となり、病院・薬局での実務実習が必修となりました。その為、私達の後輩が実習先に来て、色々な交流がしやすい環境になってきております。今後は、大学職員と在学生そして先輩がいる実習先等のパイプ役として同窓会が積極的に関与する事により、更に優秀な後輩を育成できると考えます。是非、同窓生全員が何らかの形で後輩育成にお力をお貸し出来れば幸いです。

最後に、同窓生の皆様がこれからもより愛校心を持って頂けるような事業をしてみたいと思いますので、ご支援・ご協力お願い致します。

第38回 北医療薬 総会および医療薬学セミナーについて

平成29年7月29日（土）に北医療薬 総会および医療薬学セミナーが開催されました。総会での審議事項のうち役員改選では、会長のバトンが田中稔泰先生から桂正俊先生に渡され、桂新会長のもと新たな役員組織が発足しました。また、報告事項のうち名簿作成については、次年度での発行を目指して今後活動していくことが報告されました。医療薬学セミナーには、講師として本学薬学部特任教授 小田和明先生をお迎えし、「CYP（P450）を阻害して薬理活性を発現する薬物の創製～43年目の歩み」と題し御講演を頂きました。小田先生は、助手～助教授時代の光化学反応による複素環系化合物の生成や新規歯科用麻酔薬の開発、留学期の農薬の光分解、教授時代のCYP阻害薬に関わる研究など、これまでの研究成果についてご紹介されました。また、過去

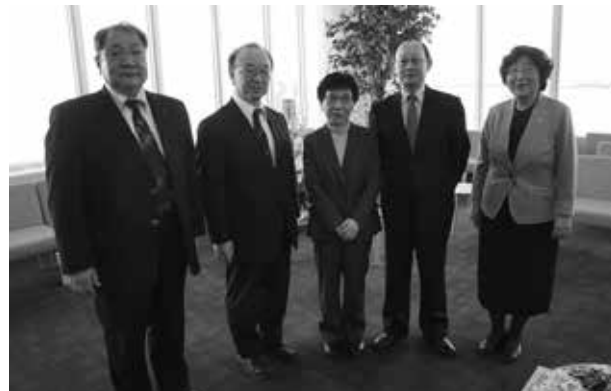
ご担当された医療薬学セミナー各地での風景を先生の油絵で紹介いただいたほか、学生への教育、42年間の振り返りとこれからしたいこと、研究室についての「家、家にあらず、継ぐを以て家とす。人、人にあらず、知るを以て人とす（風姿花伝）」という考え方など、多岐にわたる内容でご講演をいただき、大変勉強になる時間となりました。最後の、奥様への感謝とともに毎日のお弁当の様子をご紹介された時には、会場から「すごい…」との囁き声が漏れる場面もありました。

講演終了後には懇親会が開催され、小田先生にもご参加頂きました。懇親会でも活発な意見交換がなされ、同窓生の近況をはじめとした様々な話題で参加者からは笑顔がみられ、大変盛況かつ和やかな会となりました。



定年退職される先生をご紹介します

平成30年3月をもちまして、大倉 一枝 教授 生命物理学講座（放射薬品化学）、平藤 雅彦 教授 薬理学講座（薬理学）、八木 直美 教授 薬学教育推進講座（薬事法制）、和田 啓爾 教授 衛生薬学講座（衛生化学）が定年退職されました。平成30年2月26日に先生方による最終講義が行われ、その後中央講義棟10階ラウンジにて退職記念祝賀会が行われました。北海道医療大学の薬学教育への多大なご貢献に心より感謝致します。



定年退職される先生からのメッセージ

「定年退職～同窓会への感謝とともに」

生命物理科学講座（放射薬品化学） 大 倉 一 枝 教授

私は本年3月で北海道医療大学薬学部を定年退職いたしました。昭和50年の当別キャンパスの開学以来、43年の長きにわたり、東日本学園大学・北海道医療大学薬学部の卒業生、在学生、教職員の皆様から、温かいご厚情をたまわりましたことに心から感謝しております。特にこの間、教育研究の場での様々な学生さんとの出会いは、私の人生にとって、何物にも代えがたい「宝物」です。私と3歳しか差がない1期生にはじまり、初期には皆で運動会をやったり研究室ごとに大学祭の発表をしたり、和気藹々友人のような関係でありました。寺島正直教授の薬化学教室、その後の関興一教授の放射薬品化学教室で、助手時代の長かった私は最も学生さんに近く、その個性あふれる皆さんから一杯のエネルギーをいただきながら、自分自身も成長することができました。こんなに楽しく、素晴らしく、贅沢な時間はなかったと思います。あの頃学生だった皆さん、大変お世話になりました。本当に有難うございました。



そして、薬学部卒業後、あるいは研究科修了後、

病院、薬局などそれぞれの道に進まれ、ご活躍の卒業生の皆さんには、薬学部6年制の実務実習で本当に親身になってご指導いただきました。企業や公務員等でも、後輩の育成に尽力してくださっています。北海道から沖縄まで、それぞれの地域社会で、卒業生の方々が人々の身近で信頼できる薬剤師、医療人として如何に誠実に毎日をおくっておられることか、同窓会セミナーや後援会活動のたびに、そのことを私は肌で感じてまいりました。今、私は身の来し方を顧みて、これらの方々に何かお返しのできたのかというと、実はご迷惑をおかけしたことはあっても、何も恩返しはできていないという悔いが残ります。今、大学は離れますが、何か私でお役にたつことがあればお声をかけていただければ有難いと思います。

終わりに、今後生じてくる様々な社会状況の変化、健康をめぐる施策の変遷などの中でも、薬学部同窓会の皆さんご自身が健康で、それぞれの場で人々の医療、保健、生活のクオリティの向上に大いに貢献されることを祈念しております。

「定年退職にあたり」

薬理学講座（薬理学） 平 藤 雅 彦 教授

1993年4月に本学に着任以来25年が経ち、この3月で定年退職を迎えました。仙台の東北大学薬学部に入學し、40歳で本学薬学部に着任しましたので北海道は第三の故郷ということになるのでしょうか。北海道が一番長かったこととなりますが、もう25年経ったかという感慨でいっぱいです。



最終講義でも少し触れましたが、特に明確な動機もなく、何か医療分野で国家資格を取れば将来役に立つだろうという気持ちで薬学部に入り、卒業後は

出身地の花巻に帰るつもりでした。当時の東北大学教養部キャンパスは学生運動真っ盛りの時期で、活動家の乱入による授業妨害、定期試験妨害もあり、第2学年の6割ほどが留年するという大量留年生の一人になりました。私は所謂ノンポリでしたが、妨害で授業がなくなった時や留年時には、交響楽団の練習所で大学入学後に始めたファゴットの練習に精を出していました。大学を卒業した後は、まだ社会人になりたくないという気持ちもあり、大学院に進学し博士課程まで進んでしまいました。その時に研究室の事情により歯学部薬理学講座の小倉保己教授

のご指導を受けることになりましたが、その先生との出会いがなかったら私はアカデミアに残ることはなく、本学にも赴任することはなかったと思います。

大学院を卒業した後はそのまま歯学部助手として採用されることになり、研究が中心の自由な教員生活を送っていましたが、当時の研究テーマもますます面白くなり、フランスにも留学させてもらいました。しかし、やはり古巣の薬学に戻りたいという気持ちがあり、それは恩師にも伝えていました。そのことが薬理学教室前任の南勝先生にも伝わったようです。そしてある時、恩師から本学薬学部にどうだというお話がありました。それまで北海道は一度も訪れたことはありませんでしたが、恩師の強い勧めもあり着任することになりました。面接の時、北大近くのホテルから南先生の運転するRV車で本学まで案内していただいた時の景色は今でもよく覚えています。

本学には助教授として着任しましたが、早速待っていたのが講義と多くの学生、大学院生たちとの教育研究でした。それまで講義はほとんど担当していなかったのが、学生時代に受けたかつての授業を思い出し、南先生の講義も参考にして板書と教科書を使って講義をしていましたが、多分に自己満足的な講義だったと思います。ある年、学生による授業アンケートに「この授業はひどい」と書かれているのを見てショックを受けました。それからは講義資料を作って配布したり、その頃広まり始めたプレゼンソフトを使うなどしてわかりやすい講義を心がけました。その成果があったのか、私の授業がわかりやすいとある時学生に言われた時にはほっとしました。

また、研究はそれまではほぼ一人で行っていましたが、赴任時の薬理学教室には修士、博士課程とも多くの大学院生が所属しており、しかも皆熱心で活発に研究をしていました。私も色々な研究テーマの

お手伝いをさせてもらいましたが、赴任前からの培養細胞を用いた研究を行う設備・環境を整えていただき、血管内皮細胞、血管平滑筋細胞、初代心筋細胞などを用いた研究テーマをスタートさせることができました。また、細胞内カルシウム測定装置も購入していただき、熱心な多くの大学院生や先生方の協力を得ながら進めて来ることができました。自分が教室を主宰するようになってからは、飯塚先生、浜上先生、町田先生、湯谷先生や大学院生のおかげでなんとか研究室の運営、研究活動も維持できてきたと思います。

本学での25年を振り返ると、空間的にも、時間的にも、そして人生的にも、「思えば遠くに来たもんだ」と言う気がします。こちらに来る前は、北海道に住むことになるとは夢にも思ってもいませんでしたし、しかも仙台の12年に続いてさらに25年間も大学教員を務め、そのまま定年を迎えることも想像もしませんでした。しかし、この北海道に住んだことを全く後悔はしていません。むしろ、北海道の自然、風景、食べ物を楽しみましたし、多くの音楽仲間と素晴らしい交流もできました。このような“面白い”25年を経験できたことは恩師や南先生のおかげと深く感謝しております。

我々大学教員の大きな役割の一つは、学生さんたちの能力を引き出し、それを伸ばして社会人として世の中に送り出すことだと思います。これまで年間100名前後の学生達が薬剤師として卒業して行きましたので、25年でざっと2,500名ほどの学生さん達を薬剤師として社会に送り出したことになります。微力ではありますがそのお手伝いができたことは自分の大きな誇りと思っております。お世話になった本学の先生に感謝するとともに、本学部卒業生が医療現場などで益々活躍することを心から願っております。

「若返りのくすり」

薬学教育推進講座（薬事法制） 八木直美教授

私が本学に赴任したのは39年前の9月、高田昌彦先生（現名誉教授）がいらした薬剤学教室でした。当時は、4年生（2期生）が12人配属されていました。年齢が近かったからなのか、皆さんの人なつっこさに大変驚きましたが、お陰様で職場に慣れるのに時間はかかりませんでした。当初の仕事は、薬剤学の4年男子と保健所から数匹の雑種犬を頂いて来て、まだ固定台や機器が十分に揃ってはいませんでしたので、4年生が犬を押さえて高田先生が薬物投与後の採血をされ、先輩助手の川村（旧姓 栗林）先生とその血中薬物（サルファ剤）濃度の測定をしたのを今でも覚えています。



赴任して5年後には新設講座ができ、関川先生と共に薬剤学から製剤学講座に移りました。当時、薬剤学講座には助手の先生がお二人いらっしゃいましたが（杉山美恵子さんと柴田めぐみさん）、私を含めて3人の誕生日が1、2日違いであったことから、今でもお互いの近況報告を兼ねたバースデーカードのやり取りが続いています。製剤学教室で30年近く働かせて頂きましたが、その間も、本学ご出身の助手の先生達には本当にお世話になりました。薬事法制分野に移動になったのは、2015年と最近のことです。薬事法制分野のスタッフは私1人でしたが、かつて在籍しておりました薬剤学講座（薬剤学、製剤学、臨床薬剤学教室）の先生達には、分野が変わってからも大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

赴任当時の学生さん達の中には、すでにお孫さんがいらっしゃる方も増えてきました。あれから40年近く経ちますが、学生さん達に囲まれて仕事をしておりすと、とうの昔に自分もそういう歳になっていることを、ついつい忘れてしまいます。最近は、アンチエイジング的なサプリメントやハリ・ツヤを保ちシワを防ぐエイジングケア的な化粧品が次々と出ています。使い続けていくうちに、効果が現れる

物もあるのかもしれませんが、私にとってのアンチエイジングは、日々学生さん達と接することでした。かつては球技大会等のスポーツや夏休み冬休みの教室旅行の中で、最近では教室コンパや担任学生面談等で、沢山の若いエネルギーを頂いていたことを今、改めて感じております。これはどんなサプリメントや高級化粧品よりも効果的に若さを保つ（若い気分で見られる？）くすりだったと思います。

最終講義の際にも少しお伝えしましたが、私の趣味はライブ（主にロック）参戦です。野外フェスにもよく行きます。野外フェスは、20～40代の若い方達が圧倒的に多いので、初めは恥ずかしさが優先して、帽子やサングラスで顔を隠しがちでしたが、ある日のライブで卒業生にばったり出会った際、友人達に「俺のいた大学の先生」と紹介され、何だか気持ち楽になりました。時々、どうしてこんな所に結構な年のおばさんが来ているのだろう？と不思議そうな顔をされることもあります。アンチエイジングの役に立っていると信じ、定年後も足腰を鍛えつつ全国のライブに行くことができたらと思っています。

ここ何年かは、卒業生のお子さん達が本学に入学されることも楽しみの一つでした。ご子息、ご令嬢を本学に入学させたいと思って下さることは、本当に嬉しい限りです。卒業生の息子さんや娘さんと話をしていると、学生だった頃の親御さんを思い出して、心の中でニンマリしてしまいます。これからは我が子を本学に入れたいという方々が、たくさん出てくるような、魅力のある薬学部であって欲しいと願っております。

約40年の間、とても良い環境の中でお仕事をさせて頂いていたことを痛感しております。本学の職員の皆様、卒業生の皆様並びに在校生の皆さんに支えられ、無事にこの時を迎えることができました。心より感謝申し上げます。また、同窓会主催の薬学セミナーにも呼んで頂き、懐かしい方達にお会いする機会を頂きましたこと、同窓会の皆様には改めてお

礼申し上げます。今後は、先人から受け継がれてきました北海道医療大学薬学部らしさを残しながら

も、新しい風を吹かせて益々発展されますことをお祈り申し上げます。

「定年を迎えて—幸運と出会いの教育・研究生活36年」

衛生薬学講座（衛生化学） 和田 啓 爾 教授

このたび、本学における36年間の教育・研究生活を終え、定年を迎えました。本来であれば、これで退職となるところでしたが、学長からの強い要請で特任教授として本学に残ることとなったばかりでなく、引き続き学部長をもう一期拝命することとなりましたので、よろしく願いいたします。このような事情ではありますが、一つの区切りとして定年のご挨拶を申し上げます。

私は1982年4月に、本学薬学部衛生化学教室に助手として着任しました。ちょうど、6期生の学生さんが4年次の時です。その直前まで、私は、北海道大学大学院薬学研究科の生薬学研究室に所属し、天然物の単離・構造解析の研究をしており、薬学博士を取得してすぐ赴任しました。専門が生薬学であるにもかかわらず、衛生化学教室に採用されたのは、当時の主任教授であった羽賀正信先生の研究テーマである「自然毒」の研究に、食品中の有害成分の探索とその構造解明という手法が必須だったことを受け、ご縁があったということです。

実は、その前年1981年4月に衛生化学の学生実習でアルバイトとしてお手伝いをしましたので、5期生の学生さんにも1か月半ほどお会いしております。当時の大学名は、東日本学園大学と称しており、薬学部と歯学部の2学部でした。大学前にはJRの駅がありませんでしたので、列車を利用する人は皆、当別駅と本学を往復するスクールバスを利用するか、自家用車で通学（通勤）していました。運行本数も少なく、始業時間は当初、午前9時半だったと記憶しています。

当時は、4年制教育課程でしたので、カリキュラムや研究等に、時間や気持ちに余裕があったような気がしています。6月の九十九祭では研究室ごとに模擬店で盛り上がり、7月の定期試験直後から教室単位の旅行、冬はスキーツアーといった具合に年中

行事がたくさんあり、教員と学生さんとが一体となって過ごしていました。たくさんの楽しい記憶が脳裏に焼き付いています。本学は当時、薬科大学としては新参者でしたので、特に国家試験合格率は毎年の最優先課題でした。北大では国家試験対策を一切やっていなかったのが、国試対策という物自体、どんなものか最初は把握していませんでしたが、研究室の学生さんから、頻繁に「先生、解き方教えてください！」とか、「どうやったら点数があがりますか？」など様々な質問が飛び交うので、丸善で国家試験対策本を全巻自腹で買い込み、一生懸命勉強しました。「勉強はうそをつかない！とにかく信じて勉強しなさい！」とか、「ちょっと勉強してすぐに成果が出るものではない！結果が出るまでがまんしなさい！」などいろいろとアドバイスをしながら一緒に学びました。卒業や国家試験合格が決まった時は、自分が合格したような喜びを感じたのは、苦楽を共に過ごしたからだと思っています。

研究は、羽賀先生のメインテーマである自然毒食中毒に関するもので、着任当時は「ワラビの発がん性物質の探索」を手伝いましたが、まもなく名古屋大学農学部の研究班に発見されてしまったため、羽賀教授はあっさりこのテーマを打ち切りました。その数か月後、羽賀教授が、私に古びたコピーの論文を手渡し、これについて検討するように言われました。その論文のタイトルは「銀杏は多量の青酸を含有するものか？」という明治時代の症例報告でした。はじめ、この論文を渡された意味が理解できませんでしたが、羽賀教授は、多くの書籍に、「銀杏食中毒の有毒成分は青酸配糖体である」と記載されているが、違うと思う。確かめてほしいということでした。私自身は「銀杏中毒」というものにまったく認識がなかったのですが、とりあえず、研究テーマを模索しているときだったので、解明に着手しました。

なれない動物実験やアッセイ方法をいろいろためし、ある時は他大学の専門家に手技の手ほどきを受けに行ったこともありました。モルモットを使ったアッセイ方法が確立でき、ようやく毒成分の分離が進み始め、次第に没頭するようになりました。学生さんにも手伝っていただき、銀杏の殻わりを日課に夢中でした。総計約2万5千個の銀杏を割った計算になります。さて、最終的に発見した銀杏中毒の本体は、「4'-O-methylpyridoxine」(通称MPN)というアンチビタミンB6であることが判明しました。本体が解明されたことで、中毒時の治療方法を確立し、現在では救急マニュアルにも記載されるようになっております。小児に感受性が高く、毎年数件の中毒事例が報告されており、担当医から病因解明のために患者の血液、尿、髄液などが送付され、当研究室で分析して7分析例があります。研究が臨床に直結したことに対し、このテーマを提案していただいた羽賀教授に感謝する次第です。

助手から、講師、助教授(准教授)そして2000年に教授に昇任しました。すべての職位を担当したことが、その後、執行部で学内運営に携わるに当たり、それぞれの教員の立場や気持ちなどをある程度理解するのに役立ちました。

年齢が進むにつれ、講義や学部運営などに係る時間が多くなり、だんだん学生さんと一緒に過ごす時間が少なくなり、助手の頃の楽しい思い出づくりは難しくなりました。ただ、多くの経験が、学生さんへ効果的なアドバイスができるようになった気がしております。

薬学教育6年制が2006年にスタートした時、黒澤

学部長のもと、教務部長を仰せつかり、責任重大ではありましたが、カリキュラムの構築や共用試験対策、新国家試験対策といったことも何とか乗り切ることができました。黒澤先生のあとを継ぎ、学部長となってから6年間勤めてまいりましたが、薬学教育評価機構による外部評価を受け、適合評価を受けたことでやっとその役目を果たせたかなと安どしております。とはいえ、まだまだ本学は発展の余地があります。これから、教員の世代交代も進んでいくことですし、ますます本学卒業生にも大学運営に関わっていただくことを願っております。また、これからの大学運営に、同窓会の役割はこれまで以上に大きな期待を寄せています。特に教育面では、地域活動や臨床現場の臨場感ある教育は、同窓生のご協力なくしてはあり得ません。最近、若手の先生方が積極的に、演習、実習の新しい科目設計に関わっていただけるようになり、学部長として大変心強く思っております。本学並びに、薬学部の今後の益々の発展のために、同窓会のご支援をよろしく願いいたします。

最後に、本稿の副題である「—幸運と出会いの教育・研究生活36年」は、最終講義のテーマであり、その主旨は、今の私があるのは、本学での36年間の教育・研究において多くの方々との幸運な出会いがあったからこそという意味であり、心より感謝する次第です。

今後の本学、薬学部、並びに同窓会がますます発展されることを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



当時のスクールバス



左から羽賀教授、阪田助教授、和田

支部だより (中国四国支部の紹介)

薬学部同窓会 中国四国支部 支部長 勝原 聡 さん

北海道医療大学薬学部同窓会中国四国支部をご紹介致します。

当支部は名前の通り中国地方5県四国地方4県から成り立っています。北海道と規模を比較すると北海道の面積約83424km² 532万人に対し、中国四国は合わせて50725km² 1111万人で北海道の6割の面積に2倍の人々が暮らしています。北海道では532万人に国公立1私立2の3つの薬学部に対し、中国四国では国公立4私立7の計11の薬学部があり、定員割れの状況もあるやに聞いています。2倍の人口なら大学数は明らかに多いと感じます。この中にはこの春開学した公立の山陽小野田市立山口東京理科大学も含まれていますが、九州地方にも私が卒業した時からすでに3つの薬学部が新設されており、全くの私見偏見で恐縮ですが山口に必要だったのだろうか？ ABEさんのお藤元・付度？な—んてしてしまうのであります。余談ですが、山口県は本州最西部に位置しますが、薬学会も病院薬剤師会も九州地区に配属されており、九州山口病院薬剤師会等の名称となっています。いずれにしましても、四国地方の高知、中国地方の島根・鳥取には薬学部がないわけで、これらの地域また山間部・瀬戸内海の島しょ部につきましても、薬剤師の人手不足は以前から深刻な状況となっております。これまた私事で恐縮です。娘が薬剤師なのですが夫の転勤に伴い島根県M市のハローワークに何気に行った時に、「薬剤師が就職を探しに！ 本当に薬剤師か？」と職員がびっくりされた、と聞きました。そのくらい人手が足りないんだと思った覚えがあります。北海道も札幌近郊は潤っていても、その他の地域では同じような状況かと思慮しております

さて肝心の中国四国支部であります平成18年に3期、4期、6期、9期の有志が中心となり産声を上げました。設立当時は97名いた会員ですが、卒業生が蓄積される割には減少の一途を辿り、現在では82名となっております。メーカー勤務の方の転勤のせいでしょうか？移動で当支部へ転入された場合はぜ

ひご連絡いただければと思っております。

現在の卒業生の内訳は下記のとおりです。

S53～S63卒 43名
H1～H10卒 16名
H11～H20卒 17名
H21～H30卒 6名

年に1回の医療薬学セミナーの案内を往復はがきで差し上げていますが、半数は返信を頂けない状況であります。広島市での開催が殆どであり、時間的に出席が難しい・年上の訳のわからないおっさんばかりの会はどうも、という意見もあろうかとは存じます。そのおっさんの中には薬剤師から医師へ転職した4期の今井さん、広島県病院薬剤師会副会長となられた6期中村さんと、頼りになる方々も多く在籍しています。そういった方の話を伺うのもおもしろいと思います。またセミナー講師には黒沢副学長、堀田准教授、浜上准教授等々おなじみの方々を招き、大学の今の状況等も楽しく説明頂いております。セミナーの後の懇親会はいつも大盛り上がりで上下関係なく2次会3次会となることもしばしばです。セミナーは休日前に開催しておりますので、翌日ゴルフと楽しむ同窓生もおります。いつも高速度道路近くのゴルフ場を設定しているので帰りも楽のようです。また遠方の方には宿泊補助も行っていま



これは第1回のセミナー時の1コマ

前列中央に堀田准教授 筆者は肘をついています

す。薬学部同窓会を盛り上げるためにも是非ご参加
いただきたく存じます

同窓生が増えないのは仕方ない状況だとは思いま
す。悩みは先ほど述べたセミナー案内の返信がなか
なか頂けなく、参加者が限定されつつあることと、

会長を仰せつかっている私も還暦となり、世代交代
するべく若い先生方のご参加を切に願っているところ
であります。最後にまたしても私事ですが平成28
年度卒第40期生の息子が地元へ帰ってきましたので
小間使いしてやってください。

卒業生からの近況報告

第17期 薬品分析化学教室 佐藤博輝さん

私は現在、製薬会社グラクソ・
スミスクライン株式会社（以下
GSK）に勤めており、MR（医薬
情報担当者）として活動をしてい
ます。大学卒業時に某外資系製薬
会社に入社し約4年半勤めまし
たが、私自身喘息を患っていたこともあり、当時から
呼吸器系の薬剤に力を入れていたGSKへの関心が強
く、縁もあって2001年にGSKに転職しました。大学
卒業後の勤務地は仙台12年、札幌6年、そして現在
旭川で4年目を迎えています。家族構成は妻と子供
2人。転勤の度に家族には迷惑をかけて申し訳ない
気持ちでいっぱいですが、文句も言わずについて来
てくれる家族には感謝しています。



MRという職種は簡単に表現すると企業の営業部
隊であり、当然売上げを伸ばすことを会社から求
められています。しかし一般的な企業の営業職と明
らかに違う点は製薬会社は「生命関連企業」である
こと。ただ単に売上げを伸ばせば会社からの評価
が上がるという訳ではなく、自社製品の適正使用と
いう絶対条件が伴って初めて会社から評価されま
す。そこで重要になるのが医師とのコミュニケーション
です。医師との面談時に患者さんの疾患、症
状、重症度、背景などを伺い、自社製品の処方
の可能性について話し合います。通常、診察の合間に医
師と面談することが多いのですが、時には診察終了
後にまとまった時間を頂き、説明会形式で自社製
品を患者さんに処方した際のメリットやデメリット
についてのディスカッションを行います。医師とは患
者さんの病態や症状の改善だけでなく、その後の
患者さんの日常生活がどう改善するのかまで話し合

います。喘息患者さんは夜中や早朝に喘息症状が発
症し、十分な睡眠を取ることが出来ず、日中は寝不
足状態で過ごさなくてはなりません。自社製品が患
者さんの夜間の喘息症状に有用な可能性がある、そ
の患者さんの夜間症状が改善すると日中の寝不足が
解消され、もし子育て中の女性患者さんだとしたら
育児や家事が充実するかもしれません、といった患
者さんの日常のメリットまで医師とディスカッショ
ンします。もしその患者さんにとって自社製品では
メリットが無ければ他社製品を勧めることもありま
す。医師とのディスカッションの中心はあくまでも
患者さんのメリット。自社製品のメリットのみを訴
えてもディスカッションは成立しません。ですので
時には一歩引く勇気も必要になります。様々な医薬
品情報がインターネットから入手できるようになっ
た現在、MRの価値を高めるためには患者さん
ファーストの処方提案をいかにできるかがポイント
であり、1人でも多くの喘息患者さんが快適な生活
を送れるよう日々MR活動を行っています。

喘息治療薬、特にGSKでは吸入薬を扱っています
ので、患者さんへの吸入指導を行う薬剤師の先生と
お会いする事が多いです。その際、大学のOBやOG
の先生とお会いすると私のMR活動を応援して頂く
ことが多く、大学の繋がりの有難みを感じています。

私は現在GSKの地域社会貢献プロジェクトという
組織にも所属しており、ボランティア活動の企画や
推進を行っています。近年多くの企業がCSR（企業
の社会的責任）の一環としてボランティア活動を行
っていますが、GSKはセーブ・ザ・チルドレン
（子ども支援専門の国際NGO団体）への寄付やマ
クドナルドハウス（子供の看病をする家族の宿泊施

設)への支援など様々な社会貢献活動を行っています。このプロジェクトは社内公募により集まった志願者約30名で組織されており、MR、開発職、IT担当、一般薬担当、広報担当など様々な職種の社員が協力し合い、ボランティアを必要とする方々とGSK社員との橋渡しの役割を担っています。このような社会貢献活動は企業の利益に直結するものではありませんが、企業価値を高めるには重要な要素であると言われています。私自身ボランティアには全く関心が無かったのですが、2011年の東日本大震災をきっかけにボランティア活動の重要性を感じるようになりました。災害ボランティアとして2011年7月

に宮城県石巻市に行った経験がこのプロジェクトでの活動のエネルギーとなっているのは間違いのないと思います。MRビジネスとボランティア活動には一見共通点が無いように思えますが、どちらも私たちの助けを必要としている人々に貢献するという点においては同じ目的の下にあります。また、このプロジェクトで得られた新たな視点や考え方は日々の業務の中でも必ず生かされていると信じています。

私は今までMR業務と社会貢献という2輪で歩んで来ましたが、これからは家族への貢献を加え3輪で突き進んでいく所存です。

在學生からのメッセージ

薬学部 5年 木村良太さん

薬学部5年生の木村良太です。今回このような機会をいただきましたので2018年3月に行われた平成29年度台北医学大学短期派遣のことについてご紹介させていただきます。

台北医学大学と北海道医療大学は交流協定を締結しており2013年度より派遣と受け入れの学生交流事業を行っています。今回、僕は同学年の学生2名と計3名で台北医科大学短期留学に参加してきました。研修に行った3月は、気温の上下が激しく、服装に気をつける必要がありました。食に関して、日本と比べ炭水化物と肉の料理が多く、一方野菜の摂取量が足りないように感じました。また排気ガスや煙草が多いせいか、多くの外出者がマスクを着用していました。

二週間の研修日程で、病院と薬局、研究室の様子を見学させていただきました。台北の病院は医薬分業ではないため外来患者はほとんど院内薬局で薬を受け取ったり保険証がICカードとなっており患者の検査情報などを管理できたり、若年の心筋梗塞患者が多かったりなどシステムの違いや文化の違いによって薬剤師の働き方が異なることがわかりました。薬局は日本のドラッグストアと調剤薬局の間くらい規模でOTCや衛生用品をいくつも取り扱っている店舗が多いように感じました。台湾でも

少子化は進んでいるそうですが実際に街を歩いてみるとたくさんの子供が遊んでいて、日本がどれほど少子高齢化が進んでいるのかも実感しました。また、台北医学大学の学生や病院の薬剤師さんとの交流を通じて相手の言語をあまり話せなくてもコミュニケーションが可能だということを学ぶことができました。

日本の病院は、事前研修で1日だけ見学させていただいたので、これから始まる実務実習を通して今回の経験したことで気づけなかったことや台湾の病院、薬局と比較して日本の病院、薬局での特徴を見つけていきたいと思っています。

最後になりますが、北海道医療大学薬学部同窓会がますます繁栄することを願いまして、在学生の挨拶を終わらせていただきます。



台北市内のレストランにて (筆者・左)

第65回 北海道薬学大会で 本学同窓生が奨励賞を受賞

日本薬学会北海道支部第145回例会において29期卒業の鳴海 克哉先生が日本薬学会北海道支部奨励賞を受賞しました。以下に表彰演題および先生のコメントご紹介いたします。

臨床薬学分野

『臨床応用を指向した薬物トランスポータ介在性の薬物間相互作用の解析』

北海道大学大学院薬学研究院 鳴海 克哉 先生
(北海道医療大学薬学部 第29期卒業)

この度、日本薬学会北海道支部奨励賞（臨床薬学分野）を受賞致しました。これまでご指導頂きました先生方をはじめ、研究室の皆さまや家族の支援に心より感謝申し上げます。

私は膜タンパク質（薬物トランスポーター）に関する研究を続けており、現在はトランスポーターを介した「薬物間相互作用（薬の飲み合わせ）」の臨床的なリスクを評価し、薬物治療の最適化を目指した研究を行っております。今回の受賞を励みに、今後も一薬剤師の視点から目の前の患者にフィードバックできるような研究を続けていきたいと思っております。





2018年度オープンキャンパスのご案内



今年度も北海道医療大学オープンキャンパスが開催されます。



日時

6月17日(日)・8月4日(土)・8月5日(日)・9月23日(日)

※いずれの日程も11:00~16:00まで

内容

●大学概要説明

2018年度入試結果及び2019年度入試概要について説明を行います。

●学内施設見学

興味のある学部・学科に分かれて施設見学を行います。

●体験実習または模擬講義

興味のある学部・学科に分かれて行います。

●保護者ガイダンス

●個別進学相談

※ランチ付き

JR札幌駅より無料送迎バス運行

オープンキャンパスに関するお問い合わせは入試広報課まで

フリーダイヤル：0120-068-222

E-mail: nyushi@hoku-iryo-u.ac.jp

第10期生卒業30周年記念祝賀会

卒業30周年10期の会を振り返って

10期 齊藤千里 さん

2017年7月16日（日）京王プラザホテル札幌で、北海道医療大学（東日本学園大学）薬学部10期生の卒業30周年記念同窓会を盛会の中開催することが出来ました。

卒業後30年が経っているので、連絡の取れていない人達、住所がわからない人達の確認作業からスタートし、連絡の取れそうな方々にお願いして名簿を作成、プレ案内を送り正式には往復はがきにて出欠の確認を行い集計しました。

同窓会当日には会の前に貸し切りバスにて当別の大学見学バスツアーを実施いたしました。大雨の中ローソン札幌駅北口前店付近に集合して、バスの中で昼食を取りながら移動しました。

休日にも関わらず大学事務局の日下課長に案内していただき、中央講義棟の薬学臨床実習室、お洒落な10階のラウンジ、実験室等見学しました。各教室の緑のドアはそのままで懐かしかったです。

雨上がりの涼しい風にふかれながら校舎の外で帰りのバスを待つ間、30年という時を経てあの頃と変わらぬ景色を眺めながら、この大学で学べたこと、みんなと一緒に学生時代を過ごせたこと……感謝の気持ちでいっぱいになりました。

祝賀会は教室ごとに壇上で一人ずつ挨拶、スライド

ショーで集まった写真、ビデオレターを披露。2次会も同会場で自由に移動して歓談し、食べて飲んで笑って楽しい時間はあっという間に過ぎてゆきました。

ご参加の61名の皆様ありがとうございました。次回みんな元気で還暦の会 40周年同窓会で会いましょう。



第2回 薬学部同窓会 「卒業生・在校生合同懇談会」の報告

薬学部同窓会主催の第2回卒業生・在校生合同懇談会がANAクラウンズホテル札幌にて平成30年4月20日（金）に開催されました。

この会は、在校生と卒業生が交流することで、就職や実際の仕事に関する認識を深めるとともに、悩みや不安を話し、相談する機会を提供するという趣旨のもとに企画され、今年が2回目の開催となります。

当日は在校生（4～6年生）115名、卒業生50名、同窓会役員・学内職員24名、計189名の参加があり、交流を深めることができました。

進行は、桂 正俊 同窓会会長（12期）のご挨拶に続き、斎藤晃雄 同窓会副会長（10期）の乾杯のご

挨拶と共に合同懇談会が始まりました。卒業生のネームストラップの色を職種毎に変え、病院は赤色、薬局は青色、行政・企業は緑色とし、在校生は希望職種の卒業生を囲み、積極的に情報収集をしていました。

実際に現場で働いている先輩たちの生の声を聞くことができた当合同懇談会は、在校生にとって、有意義な場になったと思われます。

そして最後は、井藤達也同窓会副会長（13期）によるご挨拶と中締めで盛会のうちにお開きとなりました。

次年度も参加者にとって有意義な会になるように、理事会等で開催要綱が検討される予定です。



北海道医療大学 同窓会☆コラボ講演会 第11弾について

平成30年3月10日（土）に北海道医療大学同窓会☆コラボ講演会 第10弾が開催されました。本年度はお二人の講師をお招きしご講演いただきました。第1部では、「糖尿病の食事療法 VS 美味しい食事・楽しい食事」の題で、株式会社ウェルネスプランニング札幌 代表取締役・管理栄養士 小松 信隆先生に、糖尿病の食事療法から普段の食事のとり方まで幅広くお話いただきました。第2部では、「高齢者の「食べる力」を見える化する～多職種の共通認識と地域包括の視点から～」の題で、公立能登総合病院 歯科口腔外科診療部長 長谷 剛志先生（歯

学部2001年卒）に、高齢者における咀嚼・嚥下機能の評価から能登地域における医療・介護施設で提供される食形態の物性の検討・整理による地域包括ケ



アへの活用例までお話いただきました。いずれの御講演も大変勉強になる時間でした。今回の参加者は薬剤師、歯科医師、歯科衛生士、看護師、言語聴



覚士など医療職の方から一般参加者まで170名を超える方にご来場いただきました。

本講演会は、「口から食べられる理想に向かって」をテーマに、本学の生涯学習事業の一講座として毎年開催されています。企画運営は本学の各同窓会が合同で行っており、今後、理学療法学科同窓会・作業療法学科同窓会も参画予定です。次回は、平成31年3月9日（土）に開催を予定しております。多数のご参加をお待ちしております

（北海道医療大学同窓会コラボ講演会ホームページ <http://hokuiryoudaidousou.jimdo.com/>）。



第39回 北医療薬 総会ならびに懇親会のご案内 (医療薬学セミナーのご案内)

第39回北海道医療大学薬学部同窓会総会ならびに懇親会を下記のとおり開催いたします。総会は同窓会発展のために皆様からのご意見を頂戴し、活動方針について審議いただく貴重な機会です。多くの皆様にご参加いただき、ご意見を賜りながら、親睦を深めていただきたく思います。是非、お誘い合わせのうえ奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

総会終了後、遠藤哲也先生を講師に迎え医療薬学セミナー（札幌支部主催）を開催いたします。

記

日 時：平成30年7月14日（土）

【北医療薬 総会】 16時00分

【札幌支部 総会】 17時00分（札幌支部会員）

【医療薬学セミナー】 17時30分

北海道医療大学薬学部 准教授 遠藤 哲也 先生

「頭髪成分分析による栄養状態の評価と医療への応用（仮）」

*札幌支部主催ですが、どなたでもご参加いただけます。

*北海道医療大学薬剤師支援センター認定研修（1単位）です。

【懇親会】 19時00分（セミナー終了後）

会 費：3,000円（当日申し受けます）

会 場：ANAクラウンプラザホテル札幌

札幌市中央区北3条西1丁目 TEL (011) 242-1885

*出欠席のご回答は、[同窓会ホームページ](#)（北海道医療大学 → 薬学部 → 同窓会）で7月5日までにお知らせください。

同窓会ホームページ：<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~phalumni/>

※はがきでの受付は行いません。

お問い合わせ：dosoyaku@hoku-iryo-u.ac.jp

編集後記

昨年（2017年）薬学部同窓会では田中 稔泰前会長のあとを引き継いで桂 正俊会長が新たに就任しました。同窓会役員もフレッシュな気持ちでさらに同窓会活動を盛り上げていきたいと思っています。

会報についてのご意見ご要望もお待ちしています。

(S.K.)